

平成 3 1 年 度

芸術文化学部 芸術文化学科

推薦入試・帰国生徒入試・社会人入試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題は、全部で4ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚である。試験開始の合図があったから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
- 5 配付された問題冊子および下書用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
30.11.28
富山大学

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

2013年に、和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。登録にいたったのは、自然を尊重する日本人の基本精神にのっとり、地域の自然特性に見合った食の慣習や行事を通じて家族や地域コミュニティの結びつきを強める重要な文化だからというのが主な理由だ。大変いいことだと思う。これを機に、和食と日本人の暮らしについて過去の歴史をふり返り、食の文化を育んできた日本列島の自然と人間との関わりについて多くの人々が思いをめぐらすようになってほしい。

私の専門分野である霊長類学は、人間に近い動物の生き方から人間の進化や文化を考える学問である。人間以外のサルや類人猿（ゴリラやチンパンジー）を野生の生息地で追っていると、「生きることは食べることだ」と思い知らされる。彼らの主な食べ物は自然のあちこちに散らばり、季節によってその姿を変える植物だ。いつ、どこで、何を、どのように食べるかが、一日の大きな関心事である。群れをつくって暮らすサルたちにとっては、それに加えて「だれと食べるか」が重要となる。いつしよに食べる相手によって、自分がどのように、どのくらい食物に手を出せるかが変わるし、相手を選ばないと、食べたいものも食べられなくなってしまうからだ。

日本列島には43万〜63万年前からニホンザルがすみついてきた。人間が大陸から渡ってきたのはただか2万数千年前から、彼らのほうがずっと先輩である。日本の山へ出かけてサルを観察すると、彼らがいかにうまく四季の食材を食べ分けているかがわかる。新緑の春には若葉、灼熱しゃくねつの夏は果実と昆虫、実りの秋は熟した色とりどりの果実、そして冷たい冬は落ちたドングリや樹皮をかじって過ごす。

サルに近い身体をもった人間も、これらの四季の変化に同じように反応する。もえいずる春には山菜が欲しくなるし、秋には真っ赤に熟れた柿やリンゴに目がほころぶ。サルと同じように人間も長い時間をかけて植物と共進化をとげてきた証あかし

である。人間の五感は食を通じて自然の変化を的確に感知するようにつくられてきたのだ。

人間にはサルと違うところが二つある。まず、人間は食材を調理して食べるという点だ。植物は虫や動物に食べられないように、硬い繊維や二次代謝物で防御している。それを水にさらしたり、火を加えたりして食べやすくする方法を人間は発達させた。さらに人間は川や海にすむ貝や魚を食材に加え、野生の動植物を飼養したり栽培したりすることによって得やすく、食べやすく、美味にする技術を手にした。人間は文化的雑食者であるともいわれる。日本人もその独特な文化によって、ニホンザルに比べると圧倒的に多様な食材を手に入れることができたのである。

もう一つの違いは、人間が食事を人と人をつなぐコミュニケーションとして利用してきたことだ。サルにとって食べることは、仲間とのあつれきを引き起こす原因になる。自然の食物の量は限られているから、複数の仲間と同じ食物に手を出せばけんかになる。それを防ぐために、ニホンザルでは弱いサルが強いサルに遠慮して手を出さないルールが徹底している。強いサルは食物を独占し、決して仲間に分けたりはしない。そのため、弱いサルは場所を移動して別の食物を探すことになる。

ところが、人間はできるだけ食物を仲間といっしょに食べようとする。ひとりでも食べられるのに、わざわざ食物を仲間の元へもち寄って共食するのだ。

共食の萌芽は^{ほうが}すでにゴリラやチンパンジーに見られる。チンパンジーは時折狩猟をする。力の強いオスがサルやムササビなどを捕まえてその肉を食べるのだ。そんなとき、獲物を捕らえたオスの周りには他のオスやメスたちが群がってくる。めつたに得られない肉の分配にあずかろうとやってくるのだ。肉をもったオスは力が強いので、その肉を独占して食べようとするばできないことはない。しかし、他のチンパンジーの要求は執拗^{しつぱう}で、なかなか拒むことができず、ついには引きちぎってとるのを許してしまう。チンパンジーの世界では、どんなに体の大きなオスでも力だけでは社会的地位を保てず、仲

間の支持が必要である。肉の分配はその支持を得るために使われているようなのだ。だから、サルとは違って、チンパンジーはもっぱら弱い個体が強い個体に食物の分配を要求し、いっしょに食べるのである。

最近私たちは、チンパンジーと同じようにゴリラも、オスが大きなフルーツをメスや子どもたちに分配しているのを観察した。オランウータンにも食物の分配行動があることが知られているから、ヒト科の類人猿はすべて、おとなの間で食物が分配されるという、霊長類にはまれな特徴をもっていることがわかる。人間はその特徴を受け継ぎ、さらに食物を用いて互いの関係を調整する社会技術を発達させたのだ。

食事は、人間どうしが無理なく対面できる貴重な機会である。人間の顔、とりわけ目は、対面コミュニケーションに都合よくつくられている。人間の目には、サルや類人猿の目と違って白目がある。この白目のおかげで、1〜2メートル離れて対面すると、相手の目の動きから心の状態を読みとることができるのだ。

顔の表情や目の動きをモニターしながら相手の心の動きを知る能力は、人間が生まれつきもっているもので習得する必要がない。しかも、目の色は違っていても、すべての人間に白目がある。ということは、白目は人間にとって古い特徴でありながら、チンパンジーとの共通祖先と分かれてから獲得した特徴だということだ。対面して相手の目の動きを追いながら同調し、共感する間柄をつくることができるのが、人間に特有な能力なのだ。それが人間に独特な強い信頼関係を育み、高度で複雑な社会の資本となってきたと考えることができる。

実は、日本人の暮らしも、食物を仲間といっしょにどう食べるかという工夫のもとにつくられている。日本家屋は開放的で、食事をする部屋は庭に向かって開いている。四季折々の自然の変化を仲間と感じ合いながら食べられるように設計されているのだ。鳥や虫の音が響き、多彩な食卓の料理が人々を饒舌にする。その様子をだれも見たり聞いたりでき、外から気軽に参加できる仕組みが、日本家屋の造りや和食の作法に組みこまれている。

だが、昨今の日本の暮らしは、プライバシーと効率を重んじるあまり、食事のもつコミュニケーションの役割を忘れてきているように思う。和食の遺産登録を機に、自然と人、人と人とを豊かにつなぐ日本の和の伝統を思い返してほしい。

（山極寿一 『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』から）

問一 筆者は、食べることにに関して、サルと人間の共通点および相違点を挙げている。それらを一五〇字程度にまとめなさい。

問二 筆者は、日本人の食の変化について述べている。あなた自身やあなたの周囲において、あなたが感じている「食のあり方や変化」について、暮らしと関連づけて具体的な例を挙げ、その背景や将来像などの視点から、自由に六〇〇字程度で述べなさい。

科目
小論文

解答
用紙

問一

200 ▲ 150 100 50

総点	
----	--

受験番号

問二

700 ▲ 600 500 400 300 200 100

▲は目安文字数の位置を示す。

下書用紙